

フトミゾエビ飼育試験

玉城英信・勝俣亜生・新里享*

1. 目的及び内容

釣り餌用活きエビとして重要なフトミゾエビ(*Penaeus latisulcatus*)の飼育特性を知るため密度別飼育試験を行なったので報告する。

2. 材料と方法

天然採集及び釣具店で購入した幼エビ(1-4g)を用いた。1 t (2 m²) 水槽4面を用い飼育密度をそれぞれ10, 50, 100及び150尾/m²の4試験区を設けた。水槽は二重底にして砂を敷き流水にした。1987年5月22日から8月24日までクルマエビ用配合飼料を与えて飼育した。投与量は残餌をみながら適宜加減した。

3. 結果と考察

飼育結果を図1と表1に示した。4区(150/m²)では37日目、3区(100/m²)では67日目、2区では105日目に大量死が起ったので試験を中止した。

このことから、平米あたり500g程度が飼育密度の限界と思われる。この値はクルマエビと同程度である。

餌料効率は19-35%でクルマエビに比べかなり低く、5 g以降特に悪くなった。

雌は雄より成長が速く10 gを越えると成熟し始める。

モエビ同様フトミゾエビも飼育中に容易に成熟するうえ種苗生産技術も確立されているので、2ヶ月から

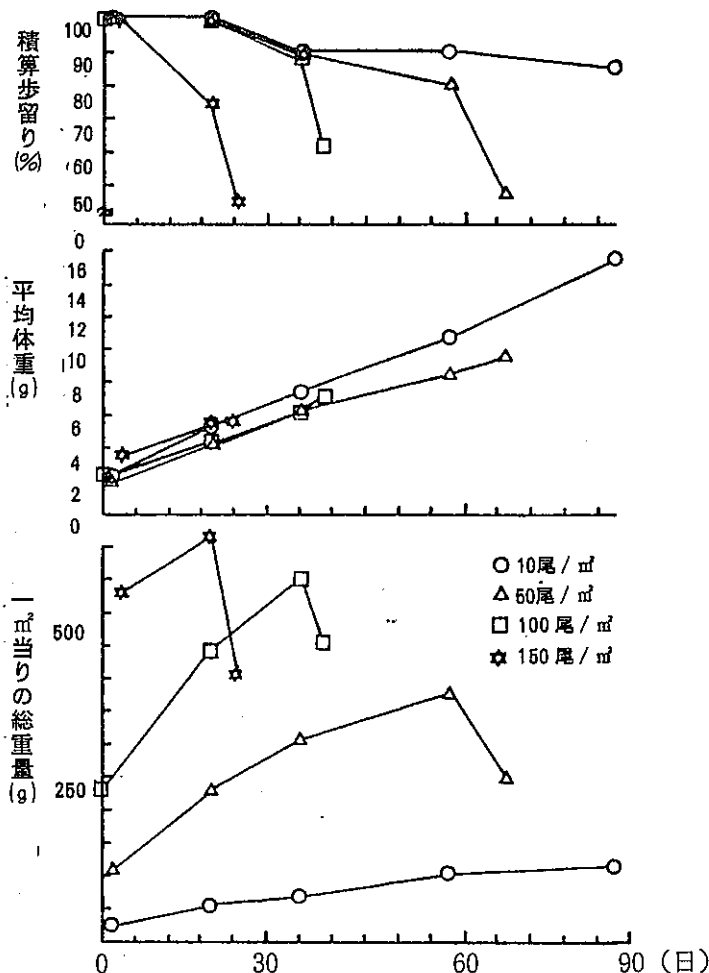


図1 フトミゾエビの成長と歩留り

3ヶ月で2-5gに育てて出荷すれば短期間の養殖として成立し得ると思われる。また、別項の採集調査の結果から天然種苗の量は相当なものと思われるので、大量に採集する方法があれば十分養殖に利用できる。

表1 フトミゾエビ密度別飼育試験結果

試験期間 (1987)		1区 (10/m ²)	2区 (50/m ²)	3区 (100/m ²)	4区 (150/m ²)
5/22-27	尾数	20	110	201	308
↓	平均体重 (g)	2.3	1.9	2.3	3.4
6/23	飼育日数	31	31	33	28
	尾数	20	107	197	228
	歩留まり	100	97.3	98.0	74.0
	平均体重 (g)	5.4	4.3	4.5	5.4
	給餌量 (g)	179	792	1,273	1,688
	餌料効率 (%)	34.6	32.9	34.4	31.8
↓	日間増重率 (%)	2.8	2.7	2.1	1.7
7/20	飼育日数		27		
	尾数	18	98	178	7/1中止(140)
	歩留まり	90.0	91.6	90.4	
	平均体重 (g)	7.6	6.2	6.2	
	給餌量 (g)	175	787	1,145	
	餌料効率 (%)	23.9	24.7	27.8	
↓	日間増重率 (%)	1.3	1.4	1.2	
8/24	飼育日数		35		
	尾数	18	88		7/27中止(126)
	歩留まり	100	89.8		
	平均体重 (g)	10.8	8.6		
	給餌量 (g)	259	973		
	餌料効率 (%)	22.2	22.0		
↓	日間増重率 (%)	1.0	0.9		
10/15	飼育日数		52		
	尾数	17			9/10中止(52)
	歩留まり	94.4			
	平均体重 (g)	13.5			
	給餌量 (g)	471			
	餌料効率 (%)	10.0			
	日間増重率 (%)	0.4			
5/22-10/15	飼育日数	145	93	67	37
	歩留まり	85.0	80.0	62.7	45.3
	給餌量 (g)	1,084	2,552	2,665	2,053
	餌料効率 (%)	19.1	26.0	30.0	26.2
	日間増重率 (%)	1.2	1.6	1.7	1.5

4. 残された問題点

- 1) 最も釣り餌の需要の高い冬場の成長試験
- 2) クルマエビ、フトミゾエビ、モエビの釣り餌としての価値の比較
- 3) 天然種苗の採集方法の検討

5. 文献

- 諸喜田茂充(1970):フトミゾエビ(*Penaeus latisulcatus* KISHINOUE)の種苗生産に関する研究-I.
 幼生飼育について. 1969年度琉球水産研究所事業報告書, 65-67.
- 諸喜田茂充(1971):フトミゾエビ(*Penaeus latisulcatus* KISHINOUE)の種苗生産に関する研究-II.
 人工飼育下での産卵回数について. 1970年度琉球水産研究所事業報告書, 93-95.